

福島からの避難者の「声」

福島から母子避難している車田麻美さんの話を「聴く会」があった。原発事故の避難者に関心があり、急きょ高槻富田（とんだ）に飛んだ。とんだことに？道に迷い、遅れて会場に到着した。



「第6回たかつき保養キャンプ」の報告が終わりかけていた。写真の報告集をもらい自宅で読み進むと、保養キャンプの取り組みがよく分かった。福島の子どもの笑顔、のびのびと遊ぶ姿が、じつに印象的だった。多くのボランティアの力により、保養キャンプは続いているという。とりわけ若いボランティアの活動には、元気をもらうことができた。

続いて、車田さんのビジュアルな講演が始まった。じつは今年1月27日の「第46回公害・環境デー」で、車田さんの短いスピーチをお聴きした。この時から、福島から大阪に避難している人たちに関心を持つようになり、原発賠償関西訴訟の裁判傍聴にも通うようになった。車田さんが書いた「手記」やインタビュー記事などを読んできたが、こうして直接、心に迫る詳しい話をお聴きするのは初めてだ。

福島県三春町で生まれた車田さんは、結婚して須賀川で暮らす。2011年3月11日、須賀川の自宅2階で震度6強の地震にあう。約20^キ離れた三春町の実家に避難した。翌日、福島第一原発で爆発が起き、三春町は安定ヨウ素剤を町民に配り始め、放射能の恐怖を身近に感じた。住民票がなく、ヨウ素剤をもらえず、かなりショックを受けた。福島を出ることにして、なんとか東京にたどりついた。都営住宅に入居したが、慣れない生活に体調を崩すことが多かった。東京も水道水の汚染などで、当時1歳の息子への影響が心配だった。再び避難することを決心し、大阪府で暮らすことになる。

母子避難を続けているが、経済的にやはり厳しい。福島の住宅ローンの返済、主人の深夜バスで往復20時間の交通費、それに医療費などなど。話は原発事故前の福島に。新築した二世帯住宅での自然に囲まれた生活。自宅の除染がフレコンバッグ54袋を出して実施されたが、放射線量は事故前の約10倍。1回きりの除染で「終了した」と。



スライドは今春スイス・ジュネーブの「国連人権理事会」へ訴えに行ったとき撮った写真。国連特別報告者が10月25日、住民の帰還が進められるが、子どもの被ばくを最小限にする義務があるとし、「フクシマに子ども返すな」という声明を発表した。被ばくから逃れる権利、避難する権利を求めていきたいと、締めくくった。

車田さんの話のあと、アットホームな雰囲気の中かで意見交換が行われた。福島からの避難者らが、この間の「思い」を語った。車田さんも大阪での苦難の生活を振り返り、多くの人たちの支援に感謝したいと。また福島からの避難者の「声」を伝えていきたい。

(2018年12月5日)